

ムスリムの一体性を強調しながらも、インド人ムスリムに次ぐ人口規模をもつ華人ムスリムは、一体性の言及に含められず、他に具体的な説明もなされない。

著者は、リーダー層と一般のムスリムとの乖離の要因として、リーダー層が政府の意向に沿って行動する管理された存在であることを強調する。第3章から第8章までの議論は、取り上げられるトピックや登場する論者の多様さに違えて、一樣に管理による多様な宗教実践の排除と、政府側とみなされるリーダーたちの求心力低下（一般ムスリムによるリーダーの排除）という説明が当て嵌められる。1991～93年にかけてのムスリム知識人協会の設立と会長人事の経過（第3章）にみられるように、物言う組織への政府の干渉や、財政支援を通じた管理がなされていることは確かかもしれないが、1990年代の政治や言論状況の説明を2000年代、2010年代の動向にまで当て嵌める議論には些か無理が感じられる。

他方で、本書の議論からは、国際的なイスラム過激派への脅威認識がシンガポール国内で高まった2001年以降、ムスリムを取り巻く環境が変化していることが読み取れる。こう考えると、ヒジャブ着用規制、「穏健なイスラム」教育、過激主義の防止など、本書が取り上げる問題の核心はいずれも、2001年の9.11事件や2002年のバリ島爆弾テロ事件、さらに2014年以降、国際的なテロを扇動した過激派組織「イスラム国」の登場を経て、シンガポールにおけるマイノリティ問題の語りが、「マレー人の問題」から、国際的な言説に結び付けられた「ムスリムの問題」へと転換したことにあるとは言えないだろうか。管理による説明を強調するあまり、この重要な画期への言及が議論としてのまとまりを欠く点は惜まれる。

政府による管理を一貫した筋立てとするには、本書での管理の実態の検証は不十分であり、言説上の管理を本質化していると思われる紋切り型の書き振りが多く見られる。ただし、管理や包摂という言葉への著者のこだわりにも踏み込んで検討すべき意味があるように思う。著者が、上からの管理を否定的に捉えながらも、一足飛びに自由な宗教実践の礼賛へ帰着するのではなく、包摂や承

認といった政府や主流社会との関係を示す言葉にこだわるのは、一方では管理を嫌いながらも、他方で承認を通して社会に位置づけられることを望むという、シンガポールのムスリムが抱える関係のジレンマを著者自身が感じ取っているからではないか。本書の行間には、そうしたジレンマや葛藤を通して、シンガポールでムスリムであることの現代的な意味を掘み取ろうとする苦闘が感じられるのである。

著者がこのテーマに強い思い入れを持っていることは確かであり、リーダー層との関係を活かした研究の今後に期待したい。その際には、お仕着せの表現に依らず、著者自身の言葉で彼らのジレンマを言語化してほしい。

（光成 歩・津田塾大学学芸学部）

参考文献

Roff, William R. 1967. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur and Singapore: University of Malaya Press.

中西嘉宏.『ロヒンギャ危機——「民族浄化」の真相』中公新書, 2021, v+252p.

バングラデシュを研究や支援の対象とするものにとって、ミャンマーの政治研究を専門とする著者による本書の出版は、大きな助けとなっている。

その一番の理由は、「なぜロヒンギャはミャンマーを追われたのか？」という問いに、本書がミャンマー側に視点を置いて専門的に、かつ正面から答えているからである。バングラデシュや南アジア、あるいはNGO活動に軸足を置く評者は、ロヒンギャの人々がバングラデシュ側でどう扱われているか、どう受け止められているかに答えることはできても、彼/彼女の出身地であるミャンマーやラカイン州の事情について正確に答えることはとてもできない。

もう一つの理由は、本書がロヒンギャという集団について、より詳細な説明をしてくれていることだ。ミャンマーの1962年以降の諸政権は、ロヒンギャを今のバングラデシュを含めたベンガル

地方からの、ミャンマー南西部のラカインへの移民あるいは不法移民だとして、ロヒンギャという呼称も拒絶してきた。これを考慮して、ミャンマーや支援に関わる人々や団体のなかには、この人々をロヒンギャや難民、あるいは民族と叫ばないものが少なくない。例えば日本赤十字社は「バングラデシュ南部避難民」と呼び、ミャンマーを追うジャーナリスト宇田有三は「宗教的少数派」だが民族ではないとしている。これに対してバングラデシュでロヒンギャ支援に当たったジャーナリストの中坪央暁は少数民族と表現している。

言うまでもなく民族に普遍的な定義は存在せず、政治的な主張であることが多い。例えばロヒンギャが避難しているバングラデシュの人々も、80年前にはパキスタン建国の父ジンナーが主張する二民族論を支持して、英領インドからパキスタンとして独立した。しかしその後間もなく、自分たちは異なる民族であると強く認識し、50年前に現在の独立国家となった。主観的な民族意識の存在は民族の重要な構成要素であり、仮にそれが70年ほど前に意識的に呼びかけられたものであったとしても、民族でないとは言いきれない。

ロヒンギャ危機の根本原因を理解するうえで、彼/彼女らが民族だという主張は大きな鍵である。ロヒンギャの人たちは、イスラム教徒だから追われたというより、イスラム教徒が大半を占めるロヒンギャという土着の民族として自治や独立を主張したからこそ、国籍を否定され迫害されているのだ。ちなみにミャンマーには、ミャンマー系、中国系、マレー系、インド系などに区分けされるイスラム教徒が約230万人（2014年センサス、ロヒンギャを除く）ほど存在しており、ミャンマーでは差別されているが、どれも固有の民族とは主張していないので、ロヒンギャのような事態に陥っていない。一方ミャンマー国内の少数民族の多くはミャンマー国籍を有しているが、10余りの少数民族組織が一層の自治を求めて今も政府と争っている。

以下では本書の構成に沿って多少の説明を加えながら、適宜本書の意義に触れていく。

序章は最初に、一般的な情報に続いて、ロヒンギャについて丹念に説明している。本書はロヒン

ギャという語はミャンマー独立後の1950年代にロヒンギャのエリートが使い始め、80年代に国際的に知られるようになったとしている。しかし古くからの民族であったと考えるバングラデシュの人々の間などでは、8世紀頃に海上で難破したアラブ人をRaham（ラハム）と呼んだのが源で、それがRhohang（ロハング）となり、最終的にロヒンギャになったという説や、イギリス人軍医フランシス・ブキャナン（1762-1822年）が、ラカインに暮っていたイスラム教徒をルーインガ（Rooinga）と記録している、といった説が一般的である。

第1章「国民の他者」は仏教徒のラカイン人中心のアラカン王国（1429-1785年）から始まり、1885年の第3次英緬戦争を経てミャンマー全域が英国植民地となったことで、インドや中国からの移民が急速に増え一層の「複合社会」となったこと、独身の労働者に加えて金貸し専門のカーストも含まれていたインド移民によって「富と女」を奪われた不満から、ヤンゴンなどでインド系への敵視が強まっていったことが、今回の事態の背景として示されている。この時期ラカインでも、隣接するベンガルからのイスラム教徒の農民が多く移り住んだ。

本章の後半は、このラカインで今回の事態を想起させる大規模な対立抗争が1942～43年にかけて起きたことに触れている。それまでこの地の秩序を保ってきたイギリス軍が一旦北の英領インド側に退却し、ビルマ独立軍とインド国民軍を含めた日本軍が進出したことによって生じた権力の空白や交代の際に、日本軍とその特務機関が支援した仏教徒の住民と、イギリス軍が組織したVフォースと呼ばれるイスラム教徒の住民の間で凄惨な殺し合いが繰り返し起き、仏教徒側でも2万人が殺されたとされている。

ここで本書は、英軍がイスラム教徒側に与えた「協力の見返り」は必ずしも定かでないとしている。しかし当時の英領インドでは、ガンディー率いる国民会議派は対英非協力運動を行っていたのに対して、ジンナー率いるムスリム連盟は二民族論に基づいたパキスタンの分離独立を求める運動を行っており、これに影響されたラカインのイスラム教徒が英軍に協力的であったことは十分推察

できよう。

第2章は、1962年のクーデター後に確立し2011年まで続いた軍事政権による出来事を記している。71年のバングラデシュ独立に伴う大混乱で、多くの避難民がラカイン地方に避難しその一部が定着した。このため78年にラカイン北部で国籍審査「ナゲーミン作戦」が実施され、これを逃れるため20万人がバングラデシュに流入し、翌年その多くが帰還した。その後すぐの82年に国籍法が改訂されて、多くのロヒンギヤは無国籍者となり、これに反発したロヒンギヤの武装組織の抵抗があった。このためミャンマー国軍が、91～92年にかけて「ミンアウン作戦」という掃討作戦を実施したせいで、91年末から約25万人のロヒンギヤが再びバングラデシュに流入した。評者はこの際、バングラデシュ赤新月社に国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)と日本赤十字社から駐在員として派遣されており、流入当初は国連も入ってこなかった中で緊急救援を必死で支援した記憶がある。この難民の多くは、評者の調べによると94～04年の間に順次帰還したが、数万人はそれを拒んでバングラデシュに残留し、国連難民高等弁務官事務所から難民証明を取得し、ナヤバラとクットパロンの二カ所のキャンプを中心に比較的安定した暮らしを営んでいた。

第3章は、そのタイトルにあるように2011年に始まったミャンマーの民主化が、ロヒンギヤに対する暴力的な紛争を激化させたという一見逆説的だが、十分に説得力ある説明を行っており、見事だ。歴史社会学者マイケル・マンを引用して、民主主義における「人」が民族である場合、民主主義は特定民族の支配を目指すものになり、最悪の場合少数民族の排除が起きるとしている。実際のところ、民主化の翌年の2012年にラカインで起きたイスラム教徒のロヒンギヤ人と仏教徒のラカイン人の間のコミュニカル紛争が、民主化で自由化されたSNSなどソーシャルメディアの普及と、969やマバタと呼ばれる反イスラム運動の拡大によって、ミャンマー全国に広まっていった。

続く第4章は、2016年と2017年のロヒンギヤ武装勢力ARSAによるミャンマーの警察と軍への攻撃と、それらに対するミャンマー側の対応を丹念

に述べており、圧巻である。本書は17年8月に始まった今回の紛争を、①ARSAとモスクなどで呼びかけられたロヒンギヤ住民約5千人による警察や軍の施設への攻撃、②国軍・警察によるARSAとその同調住民に対する掃討作戦、そして③9月5日以降の主に仏教徒ラカイン人による広範なロヒンギヤ人村落への破壊行為の三段階で述べている。これに続いて主に四つの村での人権侵害の実態を、二つの公の報告書から丹念に浮かび上がらせているが、正確な犠牲者数やレイプの状況など不明な点も多い。

第5章も、「ジェノサイド疑惑の国際政治——ミャンマー包囲網の形成とその限界」というタイトルがその内容を良く示している。ロヒンギヤに対するミャンマー軍によるジェノサイドとその関係者個人の人道に対する犯罪が二つの国際裁判所で扱われていることが、国際機関や欧米諸国、イスラム諸国などによるミャンマー包囲網であり、これとは異なってミャンマー政権側に寄り添ったアプローチを日本と中国が取っている。続いてミャンマーの国内政治状況に目を向け、軍と文民政権という分断政府の中で「受け身のリーダーシップ」を取るアウンサンスーチーらが、2021年2月1日に起きたようなクーデターが起ころうと想定していることを指摘している。

終章ではロヒンギヤ危機の解決に向けた興味深い提言がされているが、これらはアウンサンスーチー率いるNDL政権と大きな実力を保持する国軍の間でのバランスで成り立っていた政治体制を前提にしたものである。本書が公式に発刊された僅か1週間後に軍事クーデターが起きてしまったため、その前提が崩れたので、せっかくの提言がそのままでは生かせない状態である。

それでも改めてこれらの提言をロヒンギヤ難民の視点から見ると、より詳細な検討が求められる点がある。例えば「(1) 人道支援と帰還プロセスの支援」で、バングラデシュからの難民帰還の前にミャンマー国内のキャンプに収容されているロヒンギヤ避難民の日常復帰とそれへの日本の支援を提案している。しかしロヒンギヤの人々が求めているのは、帰還・復帰と国籍取得だけでなく、以前に保有していた農地や自宅地と

財産の返還・補償と、国籍に基づいたそれらの財産権の確立、つまり持続的な安全である。これら全てが確保されない限り、農民が大半のロヒンギャの人々は帰国しても生活を再建できないので、恐らく帰還しないだろう。

地元のラカインの人たちが焼き払った村や農地を、ミャンマー政府がロヒンギャの人たちの手に戻しその権利を持続的に保障することは、今の段階では非現実的に見える。しかし本書の第3章「民主化の罠」を逆手に考えてみると、クーデターによって軍事独裁政権が復帰した現在のミャンマーでは、偏狭なナショナリズムが抑えられるから、ロヒンギャの人たちの帰還が実現する条件が一つ整った、とも言えよう。実際、強権的な政権だからこそ、ナショナリズムが絡みやすい問題を改善していることもある。

そうであっても難民帰還の一番大きな障害は、多くのミャンマーの人々（その中には少数民族を含む）が抱いている、ロヒンギャ嫌い・イスラム教徒嫌いという感情に基づく排外的な民意だ。本書終章の残りの司法介入、開発支援、連邦体制の改善、国軍・警察の能力開発といった提案も内容的には妥当だが、ミャンマーの人々の今の民意を、教育やメディア、説法などを通じて、多文化共生を一層受け入れるものに変えて行くことが第一に思える。同時にロヒンギャの人々が、質の高い教育を受け、合理的で広い視野を持てるようになることも肝要だろう。もっともこれらには、即効薬はないのだが。

評者は、ロヒンギャ危機の際の犯罪が適正に裁かれること、そしてロヒンギャ難民が望む形で帰還が実現することが正道だと思う反面、それらが実現するには途方もない時間が掛かるという悪い予感を拭い去れないでいる。すでに4年近くが経過する中で、希望を持ってないロヒンギャ難民の中には、無謀な海外渡航を試みたり、麻薬取引に手を染めたり、女性は不本意な婚姻を強いられたり、人身売買の被害者になったりしているものが続出している。こうした事態を少しでも現実的に改善するために、私たちはもっと大胆な手を生み出すことはできないのだろうか。

（大橋正明・聖心女子大学現代教養学部）

参考文献

- 今井行順. 1986. 『アラカンに轟く太鼓——戦場の日本山』 東京：日印サルボダヤ交友会。
 キンニユン. 2018. 『ミャンマー西門の難題——“ロヒンギャ”がミャンマーに突きつけるもの』 東京：恵雅堂出版。
 日下部尚徳；石川和雅（編著）. 2019. 『ロヒンギャ問題とは何か——難民になれない難民』 東京：明石書店。
 村主道美. 2020. 『ロヒンギャの「物語」と日本政府』 相模原：青山社。
 中坪央暁. 2019. 『ロヒンギャ難民100万人の衝撃』 東京：めこん。
 宇田有三. 2020. 『ロヒンギャ 差別の深層』 東京：高文研。

生方史数（編）. 『森のつくられかた——移りゆく人間と自然のハイブリッド』 共立出版, 2021, xiii+234p.

森と人間がどのように互いをつくり合うか、という問いは、自然科学と社会科学のはざまにこぼれがちな新しい問いである。森林は世界各地で長く生活の一部であったから、その便益を操作すべく森林をいかに守り育てるかという関心が生じ、やがて諸国家が「財源」の一部として森林を捉えるようになったのは不思議ではない。だが、森林と人間の双方向的な働きかけに学問的なまなざしが注がれるようになったのは、単純な功利主義を超える大きな変化である。本書は、この変化の延長線上で、「自然と人間のハイブリッドがつけられ、変容し、ときに崩壊していくプロセス自体をみつめることによって、森が人間によってつけられてきた“レシビ”を再考」（p. vi）し、森林と人間の双方向的な関係を読み解く試みである。

産業革命が本格的に展開する以前には、自然の原理を優先し、そこに人間社会がどう適応すべきか、という（今から振り返れば）謙虚な発想があった。食糧供給の源たる農地の稀少性を論じたマルサスの『人口の原理』（Malthus 1798）は、自然界